

視覚障がい児童のこば力の向上に向けて ー対話型美術鑑賞方法の援用の実証的研究ー

鹿島萌子(立命館大学大学院 先端総合学術研究科 院生)

■研究計画立案の背景と目的

視覚障害児教育における言語教育は①触覚による観察と体験による概念形成・ことばの獲得、②他者とのコミュニケーションによる概念・ことばの定着という2つの柱に支えられている。しかし、①では多様な色彩表現や遠近法的表現において限界があり、②では盲学校内での限られた人間関係のなかだけではなく、外部者と出会いコミュニケーションをとることによって言語力を育む必要があると考えられる。本研究では美術教育の分野において近年注目されている「対話型美術鑑賞方法」に注目する。この方法は文字通り、鑑賞者が一つの美術作品について対話をしながら鑑賞する方法であり、近年教育的要素が指摘されている。このような対話型鑑賞に類似するものとして「視覚障害者とことばによる美術鑑賞」の取り組みがある。ここより、この「対話型美術鑑賞方法」を視覚障害教育現場へ応用することで、1. 視覚障がい児童の視覚的事物概念や語彙の獲得、および2. コミュニケーション能力を進展させる効果があるのではないかと仮説を立てた。

従って本研究の目的は、成長過程にある中学・高校生の視覚障がい生徒を対象に対話型美術鑑賞方法を実施し、「美術鑑賞」を視覚障がい児教育での美術教育に取り入れるとともに、それが視覚障がい児の言語力を伸ばす一助になるかどうかを明らかにすることである。

■鑑賞授業の実践内容

◇参加者：中学生・高校生12名(うち全盲2名、弱視10名)、協力スタッフ9名、教員6名

◇1回目

テーマ：色を味わう。色のイメージを楽しむ。

鑑賞作品：アンディ・ウォーホル《マリリン》シリーズ、アンリ・マティス《赤のハーモニー》、ヴァシリー・カンディンスキー《コンポジションⅧ》、ピエト・モンドリアン《ブロード・ウェイ ブギ=ウギ》。

各作品のカラー版作品図版に加え、補助教材として立体コピー版図版を用意。

展開：色相環づくりを通し、色のイメージについて対話する。→作品鑑賞→感想の共有化を図った。

◇2回目

テーマ：絵画のなかの空間的な広がりを楽しむ。遠近法の表現の体験。一瞬の動きの表現を知る。

鑑賞作品：葛飾北斎「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」カラー図版、立体コピー図版、立体コピー版立版古を用意。

展開：「波」のイメージについて対話→立版古を制作しながら各波や船を鑑賞→作品の全体を鑑賞→鑑賞の共有化
また、鑑賞授業の前に教員と協力者とともに事前打ち合わせを、鑑賞後に振り返りを行った。

■結果・成果・今後の課題

実践の結果、生徒は既に多くの色彩表現や遠近法的表現を知っていたことから、対話型美術鑑賞方法は、新しいことばや概念を生徒へ提供することにはつながらないといえる(仮説1.)。しかし、その理解は限られたイメージにとどまっていた。そのため実践を通じ、生徒はそれまで得ることが困難であったことばの持つイメージをより具体的に理解・拡大・深化し、文字の羅列としてではない中身を伴ったことばを増やしていくことが行われた。また、作品を介して外部者と対話を行うことで、生徒らはより多くのことばを駆使して自分の考えを相手へ伝える姿勢へと変化していった。中学生のなかに、他を認めにくい特性がある生徒が作品を見ていくにつれ、もう一人の生徒の意見を受け入れるように変化した場面があった。ここより、対話型美術鑑賞の導入は生徒らのコミュニケーション力を伸ばす一助になれると考えられる(仮説2.)。

しかし、ただ作品を前にしておしゃべりをするだけでは十分ではない。分析の結果、色相環づくりや立版古の体験をきっかけに、生徒はことばのイメージをより具体的に理解していく場面が見られた。また作品鑑賞の対話において深化・拡大化した言葉を生徒自身が用いることで、そのことばが定着化していく兆しが見えた。ここより、身体を用いた体験と対話型美術鑑賞を組み合わせた新たな鑑賞方法が、言語教育の2つの柱①・②を連携させた教育方法の開発に繋がっていくという新たな仮説が生まれた。この仮説は本実践の成果ともいえる。

今回の実践は2回限りのものであったため、まだ懐疑的な部分が多く残されている。長期的・連続的な調査を行うことでより丁寧に生徒らの変化をみていくことが今後の大きな課題である。